

神戸市立生糸検査所 (KIITO)

1.はじめに

1927 年に輸出生糸の検査を行う施設として建設された独創的な意匠の近代ビルで、2008 年度末までは隣接する旧国立生糸検査所と一体で独立行政法人農林水産消費技術センターの施設として使用されていた。

名称：旧神戸市立生糸検査所（現 KIITO 旧館）

所在地：兵庫県神戸市中央区小野浜町 1 番地

竣工年：1927 年（昭和 2 年）

設計者：神戸市営繕課（清水栄二）

施工：竹中工務店

構造：鉄筋コンクリート造（SRC 造）、地上 4 階・地下 1 階

延床面積：約 3,489 m²



図 1 旧神戸市立生糸検査所（旧館）

2. 検査所の設立

日本の生糸輸出量は、1905（明治 38）年にはイタリアを、1909（明治 41）年には中国のそれを上回り、世界最大の輸出国としての地位を確立した。

大正期に入ると関西生糸市場が隆盛となり、さらに 1923（大正 12）年の関東大震災により横浜港の機能が麻痺状態となると、神戸における生糸取引および輸出業務に対する期待が高まった。政府は 1926（大正 15）年 3 月、生糸の正量取引実施を目的として、輸出生糸検査法が公布され、翌 27（昭和 2）年、主務大臣が指定する検査地として神戸市と横浜市が指定された。1932（昭和 7）年には、生糸の品位格付け検査が強制実施されることとなったため、検査機器整備と庁舎増築の必要が生じたが、国では神戸・横浜両検査所の拡張費は望めなかった。そのため両市が建設し、国に貸し出した。

日本における代表的近代建築として、とくに神戸の近代化を象徴する建物として、高く評価される。



図2 同新館



図3 操業時

3. 当時の神戸市の状況

神戸の都心部では阪神国道（現国道2号線）が1926年に開通し、阪神・阪急の三宮乗り入れが完了（33年、36年）。駅前には1926年に三越、1927年に大丸神戸店（村野藤吾設計）、1933年にそごう神戸店がそれぞれ開店している。神戸の都市文化が開花するこの時代、神戸税関、旧神戸市立生糸検査所、旧国立神戸生糸検査所も相次いで完成した。

さらに周辺に目を配るならば、生糸検査所の南側の旧新港相互館（現新港貿易会館）が1934年に、さらに南の岸壁に沿って並ぶ大倉庫群（三菱倉庫、三井倉庫、川西倉庫）も、1924（大正13）年から1928（昭和3）にかけて竣工している。すなわち、これらの建築群は、先に述べたような神戸の近代化と同時期に、神戸の近代化を支えた港湾地区の景観を形成する要素だといえる。

神戸港の生糸の輸出割合は綿織物について第2位、約20%を占めていた。生糸の輸出先は主にアメリカで婦人ものストッキング用途であった。神戸港の輸出入に占める全国割合は40%程度であった。

参考資料、参考文献リスト

- 1) ウィキペディア 旧神戸市律生糸検査所
- 2) 神戸農林規格検査所（編）『神戸生糸検査所史』神戸農林規格検査所、1982年
- 3) 農林省神戸生糸検査所 編 農林省神戸生糸検査所、昭和10、9年、7年、
- 4) 昔も今もこれからも兵庫を築く：あなたの近くの土木・建築ものづくり 兵庫県建設業協会 2013/5
- 5) 神戸絹業史：市場隆興十周年記念 1933/10
- 6) 神戸税関、開港以来の歩み 1868年～

文責： CVV 会員 清水 文夫 2026年3月 作成